

---

# 御注文は？ ～パンドラの箱入り娘部隊で！～

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

御注文は？　　＼パンドラの箱入り娘部隊で！　　＼

### 【Nコード】

N 2 2 4 7 H

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

少しどこかおかしいこの小説の主人公、剣山零時。あらすじで少しばかり剣山零時のおかしさを教えておくとすると彼は機械が好きだった。中身も大事だと思っているのだが彼にとってはそれに見合ったヴィジュアルが必要だと思っているのである。

## (前書き)

あくまでこれは短編ですが、おもしろかった！などの感想が一つでもあればもしかしたら連載のほうにいくかもしれません。決定権はこの小説をこれから読もうとしているあなたの手にかかっているのです！それでは、どうぞご覧下さい。

御注文は？　　くパンドラの箱入り娘部隊で！　く

大学二年生、剣山零時は一年のときに単位を多くとっていたためにあまり講義に出ない。今日も今日とてバイトが休みのために下宿先（ただいま行方不明中）のあてがわれた部屋（六畳間で箆笥、机、本棚が三つとパソコン）でごろごろしていた。彼女がいればどこかにデートにでも行っているのだろうが零時の性格をいろいろと考えることができるほうがおかしいかもしれない。

「……暇だ。何か世界におきないだろうか……」

彼が想像しているのは異世界から人型機械がやってこないだろうかとか、穴を掘っていたら超古代機械文明が発見されないだろうか、机の引き出しが開いて青くてあまり役に立っていない未来の機械が来ないだろうか……そんなことを考えてばかりだった。

「……ちっ、暇だし絵でも書くか……」

スケブを本棚の一角から取り出すと机に座って開く。これまで零時が書いてきたさまざまな人型機械が描かれていた。

「……はあっ……」

ひとつ、ため息をついたところで零時の耳にチャイムが鳴り響く。

「すみませ〜ん！剣山さんいますか？」

「は〜い！！」

もしや何か実家からいいものが送られてきたのではないかと考えて急いで一階へと駆け下りていく。本当は一階に部屋があったのだが行方不明となっていたこの家の持ち主から手紙が届き、二階の使用許可が下りたのである。これまでは二階でさまざまな人には言えないことが行われていたのだが黒スーツの男たちがやってきた後に二階へとむかったのだがそこには何も残っていなかったのだ。

結局、いまだ行方不明だが消息は生存ということで確認済みだと

いうことである……もつとも、その手紙が代筆されていたらその可能性は薄いのだが。

一階へと向かった零時の視線は大きな段ボール箱を台座で押してきた宅配業者に定まった。

「はんこ、またはここにサインお願いできますか？」

「ええ、わかりました」

宅配業者の人からボールペンを受け取って指定された場所に剣山と雑な字を書く。

「じゃ、ありがとうございました」

「ええ、ご苦労様です」

零時の下宿先は小高い丘の登頂部分にあるために坂道が結構きつい。まあ、車などの乗り物に乗っていればそうそう大変というわけでもないのだが。

「実家……じゃねえな、『パンドラ本部』？」

意味わからねえなと思いつつ、この宅配の荷物は自分宛となっている。

誰かが零時に対して爆弾を送りつけた……その考えは薄く、零時に爆弾を送り付けたのか思っている連中は今のところ（あくまで、今のところであり、これから以降の未来、またはパラレルワールドのほかの剣山零時に対して何か爆発物をプレゼント♪したい人がいないということ否定しているわけではない）皆無である。人間、どこで恨みを買っているかわからないので気をつけるには越したことがない……もつとも、何かにつけて因縁をつけてくるようなちよつと被害妄想が強い人のことも頭の隅に入れておかないといけないのだが。

「ま、いいか……」

サイズにして縦一メートル、横一メートル、高さ一メートル、重さ約十キロ程度……ほぼ真四角のダンボールを玄関から入ってすぐの和室において手で直接ガムテをはがす。迷いなく破ることによって途中でわき道にそれてダンボールの薄皮ごとむいてしまうことは

なかった。

「よいせつと……」

外の扉を開け、さらに中の扉を開け、そこに……

「す……す……」

緑の軍服っぽい服を着ていて頭に『悪』とかかれた帽子をかぶっている女の子が在住であるということを確認してさっさとしめる。別のガムテープを探してきてから綺麗に元通りにする。

「……よし、あて先は『夢の島』だな……いや、『五年後の君へ』？　ううん、それならいつそのことタイムカプセルで……」

いろいろと一人でしゃべっていたのがばれたらしい……がさごと中から音が聞こえてきてごきごきという音が聞こえてきた。

『おや？　もうついてしまったようですねえ？　しかし、まだあけられてないですしい……あ、夜？　ううん？　それにしてはふたが閉まっているし……』

「よいしょつと」

零時は隣の部屋にあったダンボール（一冊一キロが十冊）を持ってきてそれを元からあったダンボールの上に乗せる。

「同じ色が四つ揃った消えるんだったな……あと、二つか」

『ちよ、ちよつと？　何をしているのですかあ？』

中からそんな声が聞こえてくるが気のせいだと考えて零時は急いで隣から同じようにダンボールを持ってくる。そして、重ねてこれで三つ目。

「あとひとつ、あとひとつ！」

『消されるう！　このまま行くと私消されますう！？』

しかし、残念ながらもうこれ以上零時の都合よくダンボールは見つかることがなかった。

「……ちっ、運のいいやつだ……」

『あ、あぶなかったあ……』

「よっこらせっ！！」

今度は上にダンボールが乗った状態でそのまま思い切り力をこめ

て謎のダンボールを押し、壁にぶつける。

ずがんっ！！！！

『いたあい！！』

ものすごい、というか家がめちゃくちゃ揺れながらも、家はその衝撃に耐えた。

「ふう、終わった」

めっちゃ運動しました、僕！という表情を見せてタオルで顔の汗を拭き……

「さてと、お茶を飲んで一眠りするか……」

『ちよ、ちよっとお！聞いてます？ここから出してくれませんか？』  
しゃべる謎のダンボールを無視し、さっさとお茶を飲んで零時は自室へと戻って寝転がったのだった。

ここは零時の夢の中……今、零時の目の前に一人の人間が倒れていた。

「……あなたが、あなたがあけてくれなかったか窒息死しちゃったじゃない！！殺してやるう！！何であけてくれなかったのお！！」

「ひいっ！！」

＊ダンボールの中に人を入れて目張りをしないようにしましょう。  
本当に、危険ですのでよい子のみんな、特に悪いこのみんなにDSの君っ！！駄目、絶対！

「はあっ！！はあっ！！はあ……夢か……」

寝覚めがわりいと叫んだあとに、急いで階段を駆け下りてラスト1というところで消すことができたダンボールを助けに向かう。

「お、おいっ！！死んでないかっ？」

急いであけて中にいた少女を取り出す……が、彼女は動かない。

「うおお、おいつっ!!大丈夫かつ!!」

前後にがつくんがつくん（実際にやると危険です、やめましょう）揺さぶっている途中でゆっくりと、だが確かに生きている証として目の前の少女は目を覚ました。

「……ふぁ……って？あれえ？人が……人が私の前にいますう!」

「よ、よかったぁ……」

零時はその場にへたり込み、炭酸の抜けたコーラのような笑みを見せる。

「……死んだかと思ったぞ」

「むう!死んでませんよ!ほら、このとおり生きています」

そういつてなぜかラジオ体操を始める目の間の少女に零時は手を上げた。

「お前、何でダンボールの中に入っていたんだ？」

「あ……」

そこで何か思い出したのかなぜかダンボールの中に逆戻り……自らふたを閉じる。

『……すみません、お手を煩わせるかも知れませんが、あけてくれませんか?』

「……は？」

『だから、あけていただきたいんですよ。これ、あけてもらわないと……せめて、形式上にでもいいですからそういったことをしてもらわないとお……いろいろと困ります』

まあ、しょうがねえそこまで頼むなら……そう思って零時は近づいてふたを開ける。

「はっはっはぁ!お前が今あけたものはパンドラの箱だぁ!そして、この中には絶望がぎっしり、詰まっている……」

満面の笑みをうかべているダンボール娘を零時は見下ろしながら

……

どすっ!!



「いったあ！何をお！するんですかあっ！？」

チョップを食らわせたのだった。

どすっ！どすっ！！どしゅっ♪（クリティカル）！！！！

「いったあいです！暴力反対い！」

「開けて損した……」

「そこはできればあ、開けてびっくりってえ……嘘です！嘘ですからその平手を無言で振り上げないでえっ！！」

振り下ろすのをやめて、中にいる少女を引っ張り出したあとに引きずって応接間に連れて行く。

「……よし、ここでは俺は主人でお前は客だ。さすがに客に対して失礼なことはできねえからな……お茶を持ってくる」

「どんどんもってきてくださいっ♪私は客だあっ！腹が減ったぞお♪」

そういつているダンボール娘を無視して冷蔵庫の手にとって開ける。中にはまだ手付かずの二リットルのお茶が冷やされていたのだった。

「よし、口開けろよ」

「え？もがっ！！」

「俺って優しいだろ？お前に飲ましてやってるんだからな……」

「むがっ！むがっ！！もぎやが！」

変な声を出しながら一リットルあたりを飲み干したところでごほあっ！という音とともにダンボール娘はお茶を噴出す。

「ごはっ！げほっ！！」

「あああ、床を汚しやがって……」

「ひ、ひどいですう！（くっ！こうなったらなき脅し＋私の魅力で……）」

うるうると目を潤ませながら、ついでに言うなら緑の軍服のよう

な服装がお茶によって透過されていた……だが、零時はそんなことでこの相手のことをかわいそうだとは思っていなかった。

「ひがっ!?! ひがががっ!?!」

少女の鼻の穴に零時は人差し指と中指(昔、そういえば人刺し指って間違えたことがあったなあ)を突っ込んでぐりぐりしていた。

「おまえよお、わかってるかぁ? かわいいからって何しても許されるもんじゃねえぞお? いいか? よおく、考えてみよう? 謎の女の子が家に来るのってどれだけ使い古されたか知っているのか? え? 知ってるんだろ? どうせならよお、俺のところには『超鋼鉄! メタル・ナイトメルナ』とかがあればいいんだよ!

超鋼鉄! メタル・ナイトメルナとは蒼い鎧に紅い槍……まるで龍のような兜をかぶっている中世の騎士をイメージした一体の騎士のことである。

「ひがい! ひがい! ひがいですう!!」

「なあ、謝れよ? 俺にさあ、謝ってくれよ? 来てごめんなさいって! わかった? 謝ればお前の話ぐらいいは聞いてやるから」

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ……と、そういった感じでダンボール娘の穴を攻めまくる。

「ひぐっ、ぐすっ……す、すびばせんでしたっ!!」

「よし、許す」

鼻の穴から指をさっさと取り出してタオルとティッシュにハンガーとTシャツにベルト、ズボン、そしてオムツを持つてくる。

顔をタオルで、鼻をティッシュで零時に拭いてもらった後にダンボール娘は首をかしげる。

「あの、ズボンまではわかるんですけどお……なんでオムツ?」

「そらあ、お前のパンツまでぐっしよりだからだろ? ほれ、脱げっ!」

はいていたスカートに手を伸ばす零時に顔を真っ赤に染めるダンボール娘。

「い、いやああああああっ!!!!」

「ひぐっ……ぐすっ………」

ズボンをはいているダンボール娘……その下にはちゃんとオムツをはいている。

「ほれ、これでもう大丈夫だろ？ さっさと話せよ、時は金なりだろ？」

「ひぐっ！ ど、どうしてくれるんですかぁっ！！ もうお嫁にいきませんよ！？」

飯台をだんっ！ とたたきながら鼻水をたらすダンボール娘の鼻にティッシュをつける零時。

「ほれ、ちーんっ！」

「ちーんっ！」

「……あのなあ、それならここに来るな。いいか？ 何かやろうと思うときは何かしらの代価が必要なんだよ」

「……た、確かにそうですすがそれとこれとは話が……」

「うっさい、絶壁！ さっさと話を始めろ」

耳をほじくりながらそんなことをいう零時の言葉を聞いて一瞬だけ顔を青くする。

「ぜ、絶壁い！？ ど、どこを見てつけた仇名ですかっ！！」

今度は顔を真っ赤にして再び台を思い切りたたき、少し痛かったようにで摩っていた。

「そらあ、絶壁は絶壁だろ？」

「た、確かにす、すこししか、その、標準値よりありませんけど」

「標準値ねえ……」

「う、うるさいですね！ それとこれとは話が別ですっ！！」

「確かに別だわなあ」

しかたねえと零時はそういつて『いひ稚児』と書かれているTシャツを着ている絶壁少女を見やる。

「ちよっと！ 呼び名が変わってますう！ ナレーター！！」

失礼……ダンボール娘は憤慨しているかのように零時をにらみつけていた。

「あんまり私を怒らせるとお！恐いんですからっ!!」  
腰に何かを隠しているのかその部分で手をこねる。

「つて、あれ？」

「おいおい、お前また何か不祥事起こしたのかよ？なんだ？ベルトを取りたいのか？そうしたらオムツになるぞ？……もしかして、露出狂か？しかたねえ、手伝ってやるよ」

そういつてズボンに手をかける。

「や、やめてくださいっ！訴えますよ？セクハラです！」

「ああ、そうそう……女性が男性に対して、お前の『ピーツ！』はちいせえよ！っていうのもセクハラじゃねえか？俺さ、思うんだけど今の時代さすがに女性を変なところで優遇しすぎだよなあ……女性専用車両があるなら男性専用車両があってもいいし、ニートも大体男性がイメージ像なのに実態としては大体半々だし……」

「あの、そういつたことは別に今ここで言わなくても……」

「ああ、そうだな……わりいわりい……じゃ、脱がしてやるから」

「そ、それは本当にいいんですっ!!!!」

「そっか、それならいい……」

そういつて席に座りなおす。

「こほん、実は私……『パンドラの箱』という悪の組織の……あの、何でロープと手錠を？」

「そらあ、あれだろ？お前、悪の組織なんだろ？」

右手にロープ、左手に手錠を握って零時は首をかしげる。

「え、ええ……つて、何で赤いローソクを？」

「喜ぶかと思つてな」

「よ、喜びませんっ！私はそんな一部の人が喜ぶようなことをされても喜びませんっ!!」

「そっか……ローソクじゃなくてこっちがご所望か？」

そういつて今度は三角の跳び箱が出てくる。

「あのう、そろそろ本当に先に進みたいんですけど……」

「そうだな、さすがにふざけすぎた」

そういつて隣の部屋にすべて道具を放り込む……その部屋には『お仕置き部屋』と書かれたプレートがかけられている。

「こほん……『パンドラの箱』は悪しき心を持つ人に『パンドラの箱部隊』を送って悪いことをしてもらうためにあるんです……って、何怪しい菓とバナナをもってるんですかっ！」

「そっかそっか、お前を使って悪いことを……それって法律に違反することでもいいんだよな？」

にやああつと笑いながら一步ダンボール娘に近づく。

「ま、まあた、確かにそうですね、そうじゃないと悪いことじゃないですから……ねえ……あはははっ」

「腕がなるぜえっ!!」

手を奇妙に動かしながら接近する零時……その姿は変質者以外の何者でもなかった。

「そ、その、私以外でよろしくお願いします……」

「いやだねえ!!」

そういつて零時はロープを握る手に力をこめたのだった。

「い、いやあああああつ!!」

「もごっ!もごっ!!」

「あああつ?きこえねえよ?もうすぐ警察が来るから安心しろよ……それまで、それしゃぶってろ」

ロープでぐるぐる巻きにされているダンボール娘は口いっぱい太さがあるバナナを口に突っ込まれていたのだった。

「もががっ!!もがっ!!」

「くくくつ、悪が滅びる日ってのはいいもんだねえっ!!」  
そんな零時の耳にチャイムの音が鳴り響く。

「あ、きたようだぜ?すぐ身柄を引き渡してやるからな?」

「むぐっ!むががっ!!」

「あ、こちらに不審者が……」

「わかりました」

新人警官である田中純一がそこで見たものは……

ロープで縛られ、口の中にバナナを突っ込んで涙を流しているいたいけな少女の姿だった。

「!？」

どこからどう見てもそれが不審者には見えず、それなら不審者はシャツにトランクスひとつの通報者のほうである。

「君！大丈夫かい？」

「……え？」

「これ、あの人にされたんだよね？お前、お前のほうが不審者だろ？」

「ち、違いますよ！」

「ごほっ……ち、違います！私がわ、悪い子だったからお兄ちゃんからおしおきを……おしおき、受けていたんです！」

「……お前、性犯罪者だったのか！」

「違います！だいたい、俺の趣味とは合わないし……」

「現行犯だ！自分で通報してくるとはなあっ!!」

新人警官はさっさと零時に手錠をかける……

「……ひどい目に合った……」

釈放された零時はひとつ、ため息をついた。

「危なかったですねえ……ひやひやしましたよ」

「お前のせいじゃあっ……ちっ、まだ疑りぶけえめでこっちを見てやがる」

交番からいまだに視線を感じたので仲がいいところを見せることにする。

「今日は何が食べたい？」

「うん！じゃあステーキ！」

零時の口が危ない角度に引きつる……しかし、ダンボール少女は空気が読めないのかニコニコ笑っていた……

零時を交番送りにしたのはダンボール少女だったが助けたのもダンボール少女だったのだ。彼女が零時を助けたときに言ったセリフ……『兄を驚かせようとしたら気が動転して兄が警察に電話をしてしまった』ということでは何か通ったのである。しかも、零時としてはおかしいのが確認時に見せられた戸籍上のコピーに『剣山ですぺあー』とあったことだった。

「てめえ、何か細工しやがったな？」

「え？わかります？」

めちゃくちゃ得意げにあんまり、というかない胸を張る。

「まあ、私がやったわけではあ、ないんですが……私、あなたの妹になってるんですよお？どうですかあ？すごいですかあ？」

「ていつ！！！」

「あたっ！！！」

チョップが鋭く光ってですぺあーの額に突き刺さる。

「……お前、何してんだよ？」

剣呑な雰囲気をもとわせながら、さらにいうなら瞳を奇妙に光らせながら零時は突然妹となったですぺあーをにらんでいた。

「こ、戸籍上とはいえ、妹ですよお！？な、仲良くしましょうよお？」

額をさすりながらうるうるした瞳で零時を見ていた。

「黙れ、てめえは悪いやつだろうがよ！そんなやつと仲良くしてたら……」

「やつ、これはこれは零時ではないかい？」

「ぐわ……」

そんな声がしたほうをぎちぎちという擬音を響かせながら零時は見る。そこには眼鏡をかけて斜めがけのかばんをかけた一人の青年が立っていた。

彼の名前は野木瑞樹。高校一年からの零時の友人であり、零時と瑞樹はこれまでさまざまな悪いことに手をつけてきた……といったも、どれもこれもしょうばいものだが。

「おやおや？ ちよつと会わないうちに彼女ができたのかな？」

「ちげえよ、こいつは……」

「お兄ちゃんの妹だよっ♪えへっ？」

まるで猫をかぶったようなしぐさをしてみせるでいすぺあーに瑞樹はうんうんとうなずく。

「なんとも腹黒そうな子猫ちゃんだね？ 君に妹がいたとは初耳だが君の妹らしい妹だ」

「……瑞樹、いっぺん引導を渡してやろうか？」

「な、なんて失礼な方なんでしょう……こんなに清純なのに！」

腕をごきごきと鳴らしながら、口元を怪しく吊り上げる零時に瑞樹はにこにこ笑いながら続ける。一方、でいすぺあーは腹黒といわれてショックを受けている真っ最中だった。

「まあ、兄妹仲良くやるのが一番さ」

「お前が言うなよ……お前、またこの前妹から家を閉め出されたんだって？」

瑞樹にも妹がいるのだが、これがまた凶暴であって見た目の麗しさとは反比例して男が大の嫌いである。それは彼の父親、兄にも向けられているために瑞樹の父親は娘に嫌われているのが相当ショックなのか零時が瑞樹と仲良くなったときにはすでに家におらず、瑞樹も一人暮らしを行っていた。

「よくある話さ」

「ねえよ」

「ありませんねえ」

こほんとひとつせきをした後に瑞樹はいった。

「……実はね、僕なりに嫌われている理由を考えてみたんだ」

「何だ？」

「……きつと、僕に恋をしているんだ！」



全世界が止まったことを実感した零時はとなりで同じく固まっているでいすぺあーの頭を軽くたたく。

「あいたっ……」

「おい、お前あれから十分もかたまってたぞ？」

「ええっ？」

「う・そ」

「……しんじゃえはいんですよっ！」

「おいおい、見せ付けてくれるじゃないか、零時……さて、話は戻るけど僕に恋心を抱いている妹にこれから会いに行くところさ」

いやあ、久しぶりなんだよねえという瑞樹に付き合うのが馬鹿らしくなってきた零時は背を向ける。

「あほくさっ！ほら、行くぞ」

「え？あ、はいっ！！」

「うんうん、今度は僕が見せ付けてやるからねえ！期待しててくれ！」

ああ、何で俺はあんなやつの親友なんだろうかと考えながらも零時は歩く。そして、隣を歩いてたでいすぺあーが零時に話しかける。

「あの、ちょっといいですか？」

「なんだ？トイレか？トイレはここから最低三分ぐらいは歩かねえとねえぞ」

「違いますう、なんでいつも決め付けるんですかあ？」

両手をぶんぶん振り回しているでいすぺあーにひとつため息をつく零時。

「……あのさ、結構前から思っていたことなんだが……」

「なんですかあ？あ、もしかして私のことをかわいい、せくし〜だ、えろていっくだあとかいっやらしいことを妄想しているんですね♪ふふ、そんなえっちなおにいちゃんにはあ、お・し・お……」

「……お前さ、『かあ』とか『ですう』とかちっせえ語尾をつけねえほうがいいと思うぞ？ぶりっ子ぶっているみたいでげんなりする」

「ぬがあんっう!?!」

真っ白になったですぺあーを放っておいて零時は下宿先へと向かって歩を進めるのだった。

「ちよちよちよちよっ!?!待ってください!?!それも込みでお話しますから!」

「お前がぶりっ子ってのはよく、わかった。いいから、別に。戸籍上の妹ってのは仕方なく認めてやるから俺の付近をうるちよるするなよ?俺、悪いんだけどぶりっ子はほんっとうに、嫌いなんだわ」

「ぬがあっう!?!って、いいんですう!?!これは、のろいをかけられているんですう!?!私はあくまでぶりっ子ぶって話しているわけじゃないんですう!」

「よし、言い訳を聞いてやろう」

「言い訳じゃありません!?!わ、私が悪の組織の一員だということはお教えしましたね?」

零時はうなずいてから首をすくめた。

「中途半端な悪の組織だよなあ……それなら改造人間作って送ってほしかった……機械よりの」

「も、文句言わないでくださいっ!?!」

「いや、言っていないぞ、文句。もっとまともなやつを送ってほしかったのは事実だけだな」

「それが文句って言うんですよっ!?!」

「いいから、話を続けろ」

自分で話の腰を折っていたくせして零時はうるさそうに話をうながすのだった。

「ぐすん……やはり、悪の組織にたいして正義の味方がいるんです……今から呼びます」

指を鳴らすですぺあーに零時は首をかしげる。それはそうだろう、誰だって悪の組織の一員が指を鳴らしてくると思わない。気がつけばですぺあーは鼻眼鏡をかけていたのだった。変に似合っ

てるなあ……と思ったがそれより先に聞かなくてはいけないことがあった。

「それで呼ぶのか？」

「いいええ、これはあ、あくまで現実世界に影響を出さない手段なんですよお」

「どういうこった？」

「つまりい、こういうことですう！」

懐からミサイルっぽいミサイルを取り出してそれを遠投で近くの建物にぶつける。

ちゅどくん！！

「お、おいっ！何してんだよ！ミサイル落したら某国がまたミサイル発射したって勘違いするだろ？」

ミサイルが落ちた建物になんだなんだと人だかりができていた。そして、その姿はくっきりと通行人たちに見られていたのだ。

「大丈夫です、先ほど指を鳴らしたことにより私を中心とした地点に縦一キロメートル、横一キロメートル、高さ一キロメートルの『箱』を作り出したんですよ。」

「……『箱』？」

自慢げにうなずいてですぺあーは説明を始めるのだった。

「今、現在……私たちは元私たちがいた別の時空にいるのですよ？しかも、あくまでそれはその場だけの形成空間であって私たちがいた元の世界では何も起こっていません」

「じゃ、どれだけ町を破壊しようとしても大丈夫ってことか？」

「ええ、あくまでそれは『箱』の中だけでの話ですけどねえ？……おっと、ようやくう、きたようですう！」

あれですうとですぺあーが指差す先にビルの上に立って太陽の逆光を浴びている一人の姿が見えた。

「……なんじゃありゃ？」

零時がそういうのも問題はない……レザースーツに露出の多い衣装、そしてまるでバンプ○ストのマークのような仮面をつけて右手には鞭を持っているSとかMとかにめっちゃう関係がありそうな女王様が堂々と立っていたのである。

「出てきましたねえ！Sウィップ！」

「あれってそんな名前かよ……」

「おーほっほっほ！！また性懲りもなく現れたのねえ、おちびちゃん！今度はお尻ぺんぺんじゃ済まさないわよ？」

豊かなバストを揺らしながらそういうSウィップに胸をはってでいすぺあーは言ったのだった。

「ふふんっ！今日こそはあ！あなたがその鞭でこの人にたたかれるんですよおっ！」

そういつて零時を指差すでいすぺあー。

「つて、俺が戦うのかよ？」

「え？」

「その『え？』ってなんだよ？俺は何も悪いことしてねえだろ？あんな変なやつと戦うのはいやだぞ、俺は」

腕を組んでそういうと、どうやら相手に聞こえたらしい……相手は一言で表すのなら怒っていた。

「あ、あなたねえっ！あたしだってこんな恥ずかしい衣装で戦いたくなんてないわっ！あの馬鹿がこんな装備をあたしによこしたのよっ！もうちょっとかっこいい衣装を用意しろって言ったのにいっ！」

鞭でビルをばしばしとたたくとコンクリートにひびが入っていた。

「……恐ろしい威力だな」

「でしょう？あまりに危険ですよ？あれで男のあれを何個壊してきたことか……」

げに恐ろしき正義の味方……零時はあっさりと背中を見せた。

「ちょ、ちょっと何を逃げようとしてるんですか？」

「知るか、お前がミサイルを投げたのが悪いんだろ？俺のせいじゃ

ない」

「え、ちょ、ちょっとそれは困りますっ!!この前のお尻ペンペンは『箱』の中とはいえ衆人の目の前でされたんですよおっ!?にやにやしている連中までいたし……」

「よかったじゃねえか?喜んでもらってよ……これでそいつらは『尻愛』だな」

「変にうまいことを言わないでくださいっ!!」

まるで漫才みたいなことをやっている二人の前に変態が降り立つ。

「……うわ!きたぞ女王様が!」

「た、助けてくださいっ!お兄ちゃん!」

「知るか!俺がいつお前のお兄ちゃんになったんだよっ!」

「戸籍上は兄妹ですよっ?萌えませんか?」

「……萌えません」

「ええっ!?!」

「おだまりなさいっ!!」

鞭が振り下ろされたときにぴしんと道路に亀裂がはいる。

「「ひっ!!」」

でいすぺあーは鼻眼鏡をつけたまま相手を見ていて、零時も同じようにかたまっていたのだった。

「あなた、今回適当にこの『箱』をつくったわねえ?あたしをおちよくってるの?」

「そ、そんなあ、滅相もおごじゃっ、ございません」

へこへこと変なところでもかみながら謝るでいすぺあーに対して零時はなにやら落ち着きを取り戻したのか相手の谷間を見ていた。

「な、何見てるのよ!変態!」

「いや、あんたに言われたくないんだが……もしかして、それ……作り物じゃねえか?」

「…………ぎくっ」

相手は思い切り零時から遠ざかって胸を隠すような仕草をする。

「やっば、そうだよなあ?機械のにおいがするし」

機械のにおいがどういったものなのか（油くさいのとはまた別物らしい）非常に気になるところだが機械好きの零時に関して言えばそういったものがわかるのだろう。

「うんうん、きつとプロテクターだな？ あんた、結構高いけど実はパワードスーツみたいなのを着てるんだろ？」

「な、なんでわかるのよ？」

「機械のにおいがするから……生身じゃねえし、ちいっとだけ触っていいか？」

なんだか怪しい瞳と怪しい指の動きをしながら変態女王様に近く機械好きの変態。どうやら女王様が一步引いてしまったようだった。

「よ、よらないでよ！ それ以上よったらこ、この鞭でたたくわよ！？」

脅してみるも、零時の歩は止まらない。

「……たたくなら思う存分たたくがいいさっ！ 俺の、俺の機械好きって心はおれねえ、砕けねえ、永遠にあり続ける不動の気持ち！ 無論、思う存分たたいた後は……そのパワードスーツ、思う存分触らせてくれよっ！？」

「ひいっ！？」

踊りかかる零時に相手は完全に戦闘意欲を失わせてしまったようであっという間に姿を消してしまったのだった。零時はひとつ舌打ちをする。

「ちっ、逃がしたか」

その顔が悪役のそれと変わらないのは彼の顔が元から悪そうだからだろうか？

「か、勝ちました！ 私、生まれて初めて正義の味方を退けましたよ！ やった！ やりましたっ！！」

そして、その後ろではですぺあーが感激のあまりに涙を流していたのだった。

「私たち、絶妙なコンビネーションを發揮できますよ、お兄ちゃん

♪

そういうでいすぺあーだったが零時は不機嫌そうにためいきをつく。

「はあっ……気持ち悪いからおにいちちゃんって言うのはやめろ……名前で呼べよ」

「え？いいんですか？そ、それなら……れ、零時さん？」

「よし、今日のところは帰るか……でいすぺあーだったか？今度またここに来て悪いことをしようぜ？」

「は、はいっ！！」

そのとき、でいすぺあーは……

「意外と、意外といい人だったんですね……会った最初は意地悪で恐い人だと心配でしたがこれから先仲良くできそうではっとしました……」

そして、零時は……

「よっしゃあ！俺が待ち望んでいた機械関係が出てくるとは意外だったぜ……でいすぺあーについていけば機械関係の相手が出てくるに違いねえ！……鹵獲、研究……目白押しだぜ」

二人の思いが交錯する中、下宿先に二人はたどり着いたのだった。

「ま、まったく！あの変態……め！だから男は嫌いなよ！」

そういう人物の元へ、一人の男が現れる。

「やあっ！久しぶりだねマイシスター！相変わらずぺたんこですばらしい……がはっ！！」

その鼻っ面に強力な一撃がたたきつけられる。そして、彼女の兄である野木瑞樹は静かに、いや結構うるさく倒れ付したのだった。

「まったく！何で私の周りには変な男しかないのよっ！！」

そう叫ぶ瑞樹の妹……野木春乃。彼女はでいすぺあーのライバルであるSウィップなのだった。

「なあ、でいすぺあー……」

「何ですか？」

「お前ももしかして機械的なパワードスーツを着たり、または半分機械なのか？」

「え？違いますよ？」

「ちっ」

「今、舌打ちしませんでした？」

「気のせいだ」

「……まあ、いいですけど……これから、二人でがんばって世界制服目指しましょうね？」

「……ああ、いいだろう。ところで、『パンドラの箱入り娘部隊』って俺とお前だけか？」

「いえ、いずれ戦力の補強として送られてくるんじゃないかって思われます」

「そっか、その中に機械っぽいやついたか？」

「え、えーと、あまり記憶にはないんですけど数人はいましたよ？」

「よし、がんばればいいんだな？がんばればそいつはここに来るんだな？」

「た、多分……」

「任せろ、俺ががんばって世界制服を目指す」

「頼もしいですよ！」

こうして、でいすぺあーと零時は出会って意気投合したのだった。  
(利害の一致といったほうが正しいだろうが)

だが、彼らの前には幾人もの正義の味方が立ちはだかるのだっ！

戦え、剣山零時！君の欲求だけを満たすために！

〈fin〉



## （後書き）

剣山零時を知っている方はご連絡下さい。あなたは結構すばらしい人です。なお、それはあくまで雨月から見た目線であるために他人にそれを自慢しても別に素晴らしくなんてないといわれる可能性があります。それと、主人公の使い回しをいつまで続けるつもりだと思われる方もいるかもしれませんがそれはそれ、これはこれなのでご了承いただきますよう作者雨月はお願ひする所存でございます。つきましては、その旨などをメッセージまたは感想などにいただくと雨月が悦びます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2247h/>

---

御注文は？ ～パンドラの箱入り娘部隊で！～

2010年10月8日15時56分発行